

表現と鑑賞によるアート理解への導入学習

—西洋美術史概説を通して—

下原美保 [鹿児島大学教育学系(美術教育)]
檜木芽衣 [鹿児島大学大学院教育学研究科]

An introduction on learning to understand art by expression and appreciation: Through the class of “The History of the Western Art”

SHIMOHARA Miho · KASHIKI Mei

キーワード：鑑賞教育、学習指導要領、言語活動、現代アート、作品制作

1 研究目的

平成20年度の学習指導要領(美術)⁽¹⁾における最大の改訂点は、表現と鑑賞の学習を通して指導する〔共通事項〕⁽²⁾が設けられた点にある。また、中学校美術の表現領域においても、1) 絵や彫刻などの表現に関する発想や構想、2) デザインや工芸などの表現に関する発想や構想、3) 表現活動に関する技能という3つの観点から構成されることになった⁽³⁾。つまり、表現領域においても、発想や構想の能力と創造的な技能を重視するよう提示されたのである。しかしながら、本学習指導要領の公示から時を経た現在でも、表現と鑑賞、あるいは発想や構想の能力と創造的な技能とは別個に語られることが多く、美術の教育現場においては未だ十分に融合しているとは言えない。

そこで本研究では、小学校や中学校・高等学校の美術の教員を目指す学校教員養成課程の受講生が、表現と鑑賞を分離しないでアートを理解するための教材開発、すなわち彼ら自身の表現を通して、作品への深い理解を促すことを目的とした実践的な教材研究を行うことにした。

2 鑑賞と表現をリンクした美術教育の実践研究—現代アートを題材にして—

1) タイムスケジュール

本研究は学校教育教員養成課程におけるカリキュラム(授業名「西洋美術史概説」)の中で実践することにした。本授業は、初等教育コース及び中等教育コースにおける選択必修科目であり、同時に中学校美術・高校美術免許取得のための選

択必修科目でもある。従来、受講生のほとんどは美術専修の学生であったが、現在では他専修の受講生が約4分の1を占めている。教育現場からの要請を受け、複数免許取得希望の学生が増えたことがその理由と考えられる。また、近年におけるアート鑑賞への関心の高まりによって、社会人の聴講生も増えている。

授業の前半は主に講義を行った。その内容は19世紀末から現代に至るまでのモダンアートの流れの紹介である。本授業ではこれらを理解するため、具体的な作品の画像や関連ビデオ、近隣の美術館での作品鑑賞を行い、作家のコンセプトについて考察を行った。ここでは作品やテーマに応じてグループごとにディスカッションを行うことを重視した。現行の学習指導要領では児童生徒のコミュニケーション能力の向上を目的に、全教科にわたり「言語活動」に重きを置くことが提言されている。その中において美術科では「鑑賞の重視」が謳われているからである。平成20年1月の中央教育審議会「幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善について」(答申)でも改善の基本方針として、「よさや美しさを鑑賞する喜びを味わうようにするとともに、感じ取る力や思考する力を一層豊かに育てるために、自分の思いを語り合ったり、自分の価値意識をもって批判し合ったりするなど、鑑賞の指導を重視する」⁽⁴⁾(下線部は筆者による)ことが謳われている。

授業の後半は、前半で紹介した作家のコンセプトを追想しながら、自らコンセプトを考え、作品

制作を行った。ここでの評価は、技能ではなく、あくまでもコンセプトを重視するものである。

具体的なタイムスケジュールは表1の通りである。

先に述べたように、第1回～第9回までは、20～21世紀の欧米を中心とした現代美術の流れを概観した。講義は毎回テーマを設定し、時代背景やコンセプト、代表的な作家や作品を紹介するものである。今年度のテーマは、後期印象派、ジャポニスム、キュビズム、象徴主義、フォービズム、抽象表現主義、ポップアート、現在活躍中のアーティストであった。

ここでは、知識の一方的な伝達ではなく、自らの考えをまとめ、発表し、他者と話し合うことで相互の価値観を知り、認め合うという自立的な鑑賞態度を育むために、課題に応じてグループディスカッションを行った。例えば、第1回のオリエンテーションでは、「芸術家ってどんな人？」という課題でディスカッションを行い、その後、グループごとの意見を全員の前で発表した。「芸術家として想起する具体的なアーティストとは？」、「そのイメージは？」などの意見を出し合うことで、受講生の年代や受けてきた美術教育、自らの体験等によって芸術家像や芸術観が異なることを確認した。その後、イギリスの現代作家、サーモン・スターリング(1967～)の「小屋舟小屋」(2005年)を紹介し⁵⁾、芸術における新たな在り方の一例を提示した。

第2回のキュビズム、第3回のフォービズム、第4回の表現主義、第6回のシュールレアリズムの講義では、最初にそれぞれの代表作品や、コンセプトを考える際の導入となる作品、例えば、ピカソの「夢」(1932年 個人)、マティスの「婦人像」(1905年 国立美術館 コペンハーゲン)ノルデの「万聖節」(1909年 ナショナルギャラリー ベルリン)、ルソーの「夢」(1910年 近代美術館 ニューヨーク)の画像を提示し、1) この作品は何が描かれているのか、2) どのように描かれているのか、3) 作品全体から受ける印象を問い、グループ内で話し合った。これは批判学習に基づく鑑賞の在り方で、講義後半の制作活動にも繋がる重要なステップである。批判的スキルを伸ばす

ことが、自らの作品制作におけるコンセプト構想を促し、自己評価の基準を明確化すると考えられるからである⁶⁾。

また、第5回のダダの講義では、最初にデュシャンの「L.H.O.O.Q」(1919年 個人)⁷⁾を提示し、デュシャンはなぜ、モナリザに髭だけを描いたのかを問い、グループディスカッションを行った。提示作品は芸術の定義そのものを疑う格好の作例として有名である。そのため、「髭をつけるのは相手をおちよくる行為?」「美の象徴に髭をつける」ことは「それまでの芸術観を否定すること?」など、意見が活発に交わされていた。

第10回以降は、学生による作品制作とプレゼンテーションを行った。本講義では、作品の技術的な出来は不問にし、コンセプトを重視したため、第10回、第11回での作品コンセプトの考案(1)(2)を重視した。ここでは、まず、1) 作品のキーワードを5点以上挙げ、次に2) コンセプトを構築、大体の考えがまとまったところで、3) アイデアスケッチを行うという順番でコンセプトを練り上げ、作品へと具体化していった。(ワークシート1) また、言語化活動の一環として、受講生が直接、指導者(下原)に自らのコンセプトを説明する時間を設け、対話の中から問題点を顕在化し、改善を試みた。

第12回、第13回は、自らのコンセプトに基づき、作品制作を行った。受講生の多くは美術専修の学生であるが、他専修からの学生や学外からの聴講生も受講しており、技術的に補助が必要な場合は実践補助者(檜木)が手伝う場面もあった。また、映像作品や日常生活の記録、他者を巻き込んだインスタレーション作品(画像によるプレゼンテーション)も多く、作品制作は、講義の時間枠を超え、活動の場は学外へ広がっていった。

最後の第14回、第15回は、作品のプレゼンテーションを行った。ここでは、出来上がった作品を提示し、鑑賞者に作品から受ける印象を述べてもらい、最後に制作者からコンセプトを語ってもらった。その後、1) 最終的な作品のコンセプトについて、2) 作品のイメージ画、3) 作品制作についての感想をワークシート2にまとめ、自己評価を行った。また、客観的評価として他の発表者

の作品についても、ワークシート3にまとめた。

2) 作品とコンセプトの具体例

以下、3点の作品例を挙げ、1) 作品の内容、2) コンセプト、3) イメージ画、4) 作者自身の感想、5) 他の学生の感想について、ワークシート2・3に基づきながら紹介したい。

作品A (作者M. K) (図1-1,1-2,1-3 以下、挿図は本論末に掲載)

(1) 作品の内容

参加者に紙を配り、そこに「今、自分が思っていること、伝えたいこと」「自分の好きな名言」を書く。紙飛行機を折って飛ばし、偶然手にしたものを受け取り、感想を読み合うという参加型作品。

(2) 作品のコンセプト

「この作品のおおまかなコンセプトは『言葉はどういう形でつたえるかを考えてみよう』です。わたしたちはネットなどで情報をたくさん入手することが出来ますが、その言葉を受け取る時にはあまり感動しないと思いました。この作品は手紙をあえて飛行機にすることで、偶然に受け取ったはずの言葉から生まれる感情の変化を感じてもらおうというものでした。」

「ヒコーキにすることで手紙をもらったときのホッとした気持ち」

「言葉は偶然にひろわれて受け取られるものである」

(3) 作品のイメージ画 (図2)

(4) 作者自身の感想

「まず、自分の考えていたことが現実で実行できたことがうれしかったです。(中略) わたしは個人での作品というよりも参加型の作品をつくることになり、一番苦労したことは「やってみないと分からない」という点があることです。想像力を駆使してある程度は予測が出来ますが、実際にしてみると予定とは異なる展開になりました。コンセプトを明確に伝えるためには何度かハーサルが必要だということが解りました。(中略) 作品を教育の面で応用するとしたら、わたしは小学生の国語の時間で活用したいと思いました。小学校では手紙を書く形式を学んで、実際に書く機会

があるので、そのときに実践したら思い出に残るのでは?と、思ったからです。(後略)」

(5) 他の学生の感想

「手紙は特定の人に書くものだが、紙ヒコーキにして不特定の人に渡してみたらという発想がおもしろいなと思った」(M.M)

「紙ヒコーキを情報伝達手段にするという斬新さと手紙というアナログ感がとても良かった。『誰に渡すもの』と言われなかったので、自分の好きな言葉を書いたが、ものすごく書いた人の性格がでるなあと思った。」(R.U)

「紙ひこうきを飛ばす行為というものを久し振りにして、とても明るい気持ちになれました。(中略) 匿名性を利用して、もっとぶっちゃけたことをメッセージに書いても良さそうです。」(A.S)

「発想がおもしろく紙飛行機がどこに着陸するか運命を楽しめた」(H.N)

(以上、傍線は筆者による)

作品B (作者A. S) (図3)

(1) 作品内容

ポーズをとった人物の画像を見て、次の人物がそのポーズに対応するポーズをとって撮影する。この行為をリレーのように繰り返し、それぞれタイトルをつけてもらう作品。

(2) 作品のコンセプト

「1枚1枚の写真は、ポーズを考えた人本人が作品となる。言葉を使わず、ポーズで対応するというジェスチャーゲームのような作品。」

(3) 作品のイメージ画 (図4)

(4) 作者自身の感想

「作品制作 (写真撮影) を進めていく中で感じたのは『受け取り方・感じ方は人それぞれ』ということだ。当初はありきたりなポーズに偏りが生じるだろうと思っていたが、1つの写真から奇想天外なポーズや謎のストーリーが生まれて、予想外なことばかりだった。私が写真を撮ってはいしたが、1枚1枚に強い個性が表れていたので、その写真の作者は写って下さった本人とし、タイトルまで考えてもらうことにした。(中略)『1つのポーズから感じ取れるものはひとそれぞれ』ということが分かり、このことはこれからの彫塑活動においてポーズ決めの際に役立つと思った。」

(5) 他の学生の感想

「ひとつのポーズが様々な情報へ変わるの面白い。」(M.K)

「同じポーズでも印象が変わった。」(M.K)

「ポーズをとるのが楽しかった。面白いポーズを撮りたいと思うと、恥ずかしさから脱却することができた」(A.K)

(以上、傍線は筆者による)

作品 C (作者 M・M) (図5)

(1) 作品の内容

加工していない人物の画像と、本人の要望によって加工した画像を併置した作品。

(2) 作品のコンセプト

「Twitter や Facebook、LINE などの SNS が普及する現代では、スマホのアプリや画像編集ソフトで自分の写真を実物より美しく加工したものをネット上にアップしたり、アイコンにしたりする人が少なからずいる (自撮りを加工)。この、自分の写真を美しく加工し、さもそれが本来の姿であるかのように振る舞っている人々に、以前からそれでは写真の意味がないのではないかと疑問を抱いていた。そのため今回は何人かの写真を本人の要望をもとに加工し、今、写真はどのようなツールになっているのかを見つめたいと思い、この制作をするに至った。」

(3) 作品のイメージ画 (図6)

(4) 作者自身の感想

「本人の要望にもとづき、写真加工している中でひとつの仮説が思い浮かびました。それは「写真を加工する」ということが、「絵を描くこと」に似ているのではないかとということでした。(中略) 写真という技術が登場してから絵画はイリュージョンを使って写実的に描くことから脱却していったと学びました。それは写真が絵画を描かなくとも、写実的に、というよりもあるがままなのに、その姿を加工することで写真の意味がないのではとっていました。今回制作をしたことで、今、写真は絵画に近づいている、絵画に帰ろうとしているのではという結論に至りました。」

(5) 他の学生の感想

「絵に近づけた写真という偽物が世の中では (特に SNS) 当たり前流通しているという点に目を

付けたのがすごいと思った。」(A.S)

「現代の闇を見せつけられた気がした。今の若い子たちの [美] への追求は [自分] を [作品] として公開することで完成するのだと思う。(中略) ネットだけの友人なら本来の自分の姿など必要ない。私は顔写真の加工やプリクラを SNS で使用することは一種の自衛と防犯だと思う。」(R.U)

「ネット等の整備によって、直接会わない分いくらでもごまかせてしまうというのは本当に怖いと思う」(A.M)

「SNS を通じてのコンセプトも面白かったです。」(A.I)

(以上、傍線は本論筆者による)

3 実践の分析

以下は、作品 A・B・C について、実践補助者(檜木)と実践指導者(下原)が、作品自体の意味付けや鑑賞と制作の関係を中心に分析したものである。

【実践補助者(檜木)】

作品 A は、紙飛行機を使つての参加型作品だが、鑑賞者自らが表現者となって作品の一部になり、同時に鑑賞者の立場も失わない点で、鑑賞と表現の一体化が実現された例である。コンセプトは不特定の人物へ言葉を届けるというものだが、日常で、不特定の人物にとりあえず言葉を一方的に投げかける機会を持つものに SNS がある。しかしながら SNS との決定的な違いは、受け取った相手を見ることが出来る点にある。紙飛行機という、自分の手から離れてもそう遠くない範囲しか飛ばないツールで再現したからである。今回は授業を観察する立場であったが、作品制作が進行する中で、何を書けばよいのかを悩む学生が多数見られた。これは参加者が皆顔見知りだったことによるものではないかと推測する。「友人に急に思われるのは恥ずかしい」という心理が働いたのである。その結果、言葉のほとんどは自分の好きなアニメや本の台詞が選ばれている。今回は顔見知りである受講者たちの中で活動は行われたが、全く知らない他人、この作品がなければおそらく接点を持つこともなかった人々を集めて、匿名性をさらに高める作品へと展開すれば、伝えたい本音や言葉はもっとスムーズに出てくると考えられる。

作品Bでは、実際に作品制作に携わった参加者が、「恥ずかしさを脱却した」と述べているが、相手のポーズに便乗する上で、一人じゃないという安心感が生まれてきたようだ。実際の撮影は一人であるにも関わらず、である。この点は興味深い。これは、受容者による自由解釈が許されたためと考える。通常、人がコミュニケーションツールとして最も用いるものは言葉と態度である。それには必然的に意図が伴う。しかし、この作品は、コミュニケーションを目的としていながら、情報発信者の意図をまったく考慮しない。そのため、受容者は、思い思いに解釈し、相手に発信する。最初の発信者は、そもそも意図がないのだから、受容者の発信を見て、初めから意図があったように解釈する。そのため、受容者は、一人で撮影されながら、実は発信者と極めて新しいコミュニケーションをとっているのである。コミュニケーションとは、発信・受容・再発信という過程であるが、この作品は、より自由なコミュニケーションを実現させたといえる。

作品Cでは、「自衛と防犯」という言葉が感想の一つにあったが、それだけ、加工で顔を変えてしまうことができる。ほぼ本人ではなくしてしまうことも可能で、つまり誰でも簡単に「セルフ肖像画」を作れるのが現代社会である。そこに着目したこの作品は、真実の記録のために生まれた写真が絵画に回帰することを作品制作のなかで見出し、それを鑑賞者も感じることが出来る作品である。自分の顔を使って表現し、それを鑑賞し、自分の顔について考え、また、当時の参加者でなくても簡単に実践出来るため、非常に参加しやすいアートであると言える。

【実践指導者（下原）】

作品Aは、同じ言葉であっても、伝達方法が異なることで、受け取り方に違いが生じることに着眼した作品であった。作者の意図した「ヒコーキにすることで手紙をもらったときのホッとする気持ち」は、(紙飛行機を飛ばすことで)「明るい気持ちになれた」(A.S)等の感想からも伝わっていたことがわかる。また、「言葉は偶然にひろわれて受け取られるものである」という点も作品の重要なポイントである。差出人がわからない、しか

も誰が受け取るのかもわからないという匿名性と偶然性が本作品の特徴である。感想にもあるように、匿名であることより、発信者は「自分の好きな言葉」(R.U)を書くことができ、受信者は「紙飛行機がどこに着陸するか運命を楽しめた」(H.N)ようである。また、コンセプトを理解した鑑賞者からは「匿名性を利用して、もっとぶっちゃけたことをメッセージに書いても良さそうです。」という新たな提案も生まれた。本活動の中では、作者によるコンセプトの構想、作品化、他者(鑑賞者)による作品制作への参加(紙飛行機に言葉を書く、飛ばす、飛んできた飛行機の言葉を読む)、作品理解、新たな提案という一連の流れを見出すことができた。

作品Aとは対照的に、作品Bは言葉を介さない身体によるコミュニケーション、つまり「言葉を使わず、ポーズで対応する」作品であった。合計20名が本作品に登場しており、上記(A.K)の感想より、それぞれが積極的に活動自体を楽しんでいたようである。また「面白いポーズを撮りたいと思うと、恥ずかしさから脱却することができた」(A.K)という感想も身体表現を考察する上で興味深い感想であった。かつて筆者(下原)は、異文化理解を主な目的とした「なりきりえまき」という実践研究を行った⁶⁾。この活動は、絵巻のストーリーを作成し、自らが登場人物となってポーズをとり、写真撮影し、絵巻の背景にカラージュしてオリジナルの絵巻を完成させるものである。一連の活動の中でポイントとなったのが、「なりきる」行為である。「なりきる」すなわち変身して自分と異なるキャラクターになることは、コスプレなどの日本のサブカルチャーにもよく見られる。この行為は、現代の若者がリアルな自己に直面することを避け、他者にすり替わる方が自己表現しやすいことを反映している。作品Bでも、面白いポーズをとること＝他者として演じることを意味しており、作品制作という前提が存在することより、スムーズな身体表現に繋がったと推測される。また、作品Aの場合、発信者のメッセージは明確であるが、受け取る側(以下、受信者とする)は不特定であった。作品Bの場合、発信者のメッセージは明確な文字情報ではなく、ビジュアル情報で

あるポーズであった。受信者はそのポーズより発信の意図を推測し、これに応じて自らもポーズをとってその意図を発信するというのが本活動である。つまり、発信者の意図と受信者の受け取った情報は必ずしも一致せず、受信者によっても受け取った情報は異なる。「ひとつのポーズが様々な情報へ変わったのがおもしろい」(M.K) という感想は、本作品からビジュアル情報によるコミュニケーションの本質を見出したものであった。

作品Cは、TwitterやFacebookに掲載された自撮り加工の写真に注目した作品で、加工前提の写真に本来の意味は存在するのか、という疑問からスタートしている。「今の若い子たちの〔美〕への追求は〔自分〕を〔作品〕として公開することで完成するのだと思う。」(R.U)等の感想より、作者の感じた違和感と多くの若者が抱いており、作品コンセプトも共感しやすいものであった。作者は制作活動の途中で、「写真を加工することが、絵を描くことに似ているのではないか」という仮説を立てている。作品制作者の主観による絵画と、客観的な画像の切り取りである写真との関係は、絵画史や写真史の中で常に変動してきた重要なテーマであった。本作品は、現代の若者の眼で、絵画と写真の新たな関係の再考を提案しているといえよう。一見、シンプルな作品であるが、鑑賞者にとっても身近なテーマであるため、作品制作後の感想も数多く寄せられた。ネットだけなら自分のリアルな姿は必要ないので、加工した顔写真は「一種の自衛と防犯だと思う」(R.U)、ネットの中では直接会わない分ごまかせるので「本当に怖いと思う」(A.M)等の感想は彼らの現実的な生活を反映していた。制作を終えた作者は、制作途中の仮説通り「今、写真は絵画に近づいている、絵画に帰ろうとしている」という結論に至っていた。

小括

本実践研究では、コンセプトを重視した作品制作を通して、より深い作品への理解を追求した。特に、上記の3作品は、いずれも参加型作品であり、鑑賞者自身も作品制作に関わった点が特徴的であった。つまり、鑑賞者自身が作品コンセプト

を理解し作品制作を手掛けるという、「鑑賞」と「表現」が一体化した活動になっていたのである。各々の感想から確認できたように、鑑賞者は自分の作品のみならず、他者の作品でも、身体を通してその制作に関わることで、作品の意味を深く理解していた。今回は作品としての技能を問わない点で、美術専修以外の学生や年齢層の異なる聴講生にも比較的取り組みやすい試みであった。また、現代を生きる学生の作品であるため、そのテーマは必ずから現代的な問題点より派生したものであった。難解なイメージがつきまとい、敬遠されがちな現代アートの理解においても、本実践研究は有効であったと考えられる。

本研究の前半では、単なる美術史の流れを紹介するのではなく、言語活動を重視したグループディスカッションを行った。作品鑑賞後の重要な指摘や批判的な視点は、その過程で養われたと推測される。

参加型作品の場合、活動の途中で参加者より寄せられた言葉が、作品の方向性を左右することが起こる。今回は活動途中の言葉を収集することはできなかったが、これらを分析することで、制作者と鑑賞者の関わりや、そこから派生した新たな作品展開を把握することができるだろう。この点は、今後着手すべき課題としておきたい。

註

- ¹ 平成20年3月28日 文部科学省告示第28号
- ² 「〔共通事項〕は小学校図画工作と関連を図りつつ、生徒一人一人の創造性をはぐくむための豊かに感じ取る力を育成するために〔A表現〕及び〔B鑑賞〕の各領域に共通に働く資質や能力を示している。」
(「第三章 中学校美術科の改訂事項の解説」「6〔共通事項〕」『中学校新学習指導要領の展開美術科編』福本謹一ほか編 明治図書出版会社 p95,1～3行引用)
- ³ 中学校学習指導要領(平成20年3月28日 文部科学省告示第28号)
第6節 美術
第2 各学年の目標及び内容(第1学年～第3学年まで同様)

(中略)

2. 内容

A. 表現

(1) 感じ取ったことや考えたことなどを基に、絵や彫刻などに表現する活動を通して、発想や構想に関する次の事項を指導する。

(中略)

(2) 伝える、使うなどの目的や機能を考え、デザインや工芸などに表現する活動を通して、発想や構想に関する次の事項を指導する。(中略)

(3) 発想や構想をしたことなどを基に表現する活動を通して、技能に関する次の事項を指導する。

- 4 「幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善について」

(平成 20 年 1 月 中央教育審議会 文部科学省

HP http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo0/toushin/_icsFiles/afieldfile/2009/05/12/1216828_1.pdf p97)

- 5 小屋一軒を解体して一艘のボートに組み立て、作家はそれを漕いで、ドイツから美術館のあるバーゼル(スイス)へ移動する。そこで再びボートを小屋に作り直すという作品。「美術と呼べるものの範囲を拡張し、美術家たちが自らの美術を思い描きつくり出していくそのやり方をも不断に拡張し続けているという点で、現代美術家たちの 21 世紀生活との切り結び方を示す」好例。(「第 1 章 美術家という概念と視覚芸術」『美術館活用術 鑑賞教育の手引き ロンドン・テートギャラリー編』美術出版社 2012 年 7 月) P11 より引用

- 6 茂木一司・佐藤真帆「Q103 批判学習(Critical Study)の内容と方法 批判学習の方法と学習のポイントは何ですか。題材例もあればお願いします」(『美術科教育の基礎知識』福田隆真 福本謹一・茂木一司編 建帛社 平成 22 年 10 月 15 日 四訂版) p140 参照

- 7 『世界美術大全集 第 27 巻 ダダとシュルレアリスム』(乾由明ほか編 小学館 平成 8 年 [1996] 12 月) 掲載分

- 8 下原美保・茂木一司・山本みどり「絵巻をつかっ

たワークショップの実践研究ー〔なりきりえまき〕を例としてー」(『大学美術教育学会誌』39 号 平成 19 年 [2007] 3 月)

参考文献

『中学校学習指導要領解説 美術編』(文部科学省 日本文教出版株式会社 平成 20 年 [2008] 9 月 25 日)

『美術科教育の基礎知識』(福田隆真・福本謹一 茂木一司編 建帛社 平成 22 年 [2010] 10 月 15 日 四訂版)

表1

	各回のテーマ	授業の概要・使用した資料 等
第1回	オリエンテーション	ディスカッションのテーマ 「アーティスト」とは
第2回	後期印象派とジャポニスムについて キュビズムについて	ディスカッションのテーマ ピカソ「夢」(1932年 個人) 1) この作品は何が描かれているのか 2) どのように描かれているのか 3) 作品全体から受ける印象
		紹介した作家 セザンヌ・ゴッホ・喜多川歌麿・ピカソ・ブラック
第3回	象徴主義について フォービズムについて	ディスカッションのテーマ マティス「婦人像」(1905年 国立美術館 コペンハーゲン) 1) この作品は何が描かれているのか 2) どのように描かれているのか 3) 作品全体から受ける印象
		紹介した作家 モロー・マティス・ヴラマンク・ドラン、萬鉄五郎
第4回	表現主義について	ディスカッションのテーマ ノルデ「万聖節」(1909年 ナショナルギャラリー ベルリン) 1) この作品は何が描かれているのか 2) どのように描かれているのか 3) 作品全体から受ける印象
		紹介した作家 ムンク・ノルデ・ココシュカ
第5回	ダダについて	ディスカッションのテーマ デュシャン「L.H.O.O.Q」(1919年 個人) デュシャンはなぜ、モナリザに髭だけをつけたのか
		紹介した作家 デュシャン・マン・レイ
第6回	シュールレアリズムについて	ディスカッションのテーマ ルソー「夢」(1910年 近代美術館 ニューヨーク) 1) この作品は何が描かれているのか 2) どのように描かれているのか 3) 作品全体から受ける印象
		紹介した作家 ルソー・ダリ・キリコ・エルンスト・マッソン
第7回	抽象表現主義について	紹介した作家 ポロック・ロスコ・ニューマン
第8回	ポップアートについて	紹介した作家 ウォーホル・ハミルトン・リキテンシュタイン・ウェッセルマン
第9回	現在活躍中のアーティストについて	紹介した作家 村上隆・ハーストほか
第10回	作品コンセプトの考案 (1)	ワークシート1 1) 作品のキーワード (5点以上)・2) コンセプト・3) アイデアスケッチ
第11回	作品コンセプトの考案 (2)	同上
第12回	作品制作 (3)	ワークシート2 1) 作品のコンセプト (最終) 2) 作品のイメージ画 (最終)・3) 作品制作についての感想
第13回	作品制作 (4)	同上
第14回	作品発表会 (1)	ワークシート3 他の受講生の作品の感想
第15回	作品発表会 (2)	同上

作品 A



図 1-1



図 1-2



図 1-3

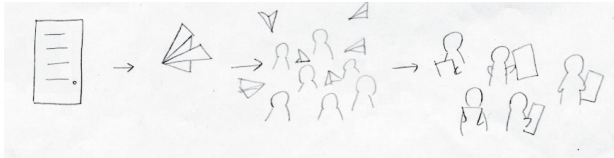


図 2

作品 B



図 3-1 「左右対称」



図 3-2 「見られてしまった」



図 3-3 「負けてたまるか」



図 3-4 「後輩に蹴られた」



図 3-5 「ヨガ」

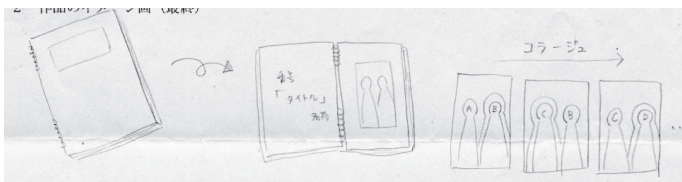


図 4

作品 C



図 5

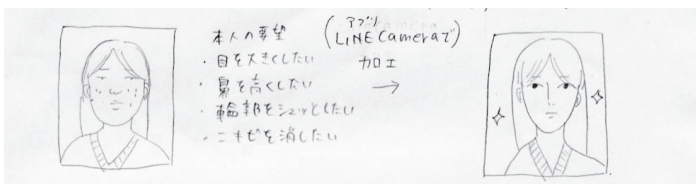


図 6